博物館への異動のご挨拶にかえて

２年前、就職のため札幌から釧路へ来て、個人的な興味で初めて手に取った本は、『釧路を歌う歌集』という、旧釧路市が1984（昭和59）年のたんちょう国体開催に併せて刊行した冊子でした。この冊子には釧路を歌った歌謡曲が約80曲も収録されており、もともと芸術を勉強中で、歌謡曲にも興味があった私は、釧路が「歌の街」に感じられて心躍ったことを覚えています。

この冊子の収録曲には、幣舞橋のたもとに歌碑がある美川憲一の「釧路の夜」や駅のプラットホームで流れていたという三浦洸一の「釧路の駅でさようなら」などがみえます。また、近年のご当地ソングとしては、水森かおりの「釧路湿原」や山内惠介の「釧路空港」が挙げられますが、ここでは、冊子の一番目、今年で初点灯から130年の釧路埼灯台を歌った小柳ルミ子の「赤い燈台」（1974（昭和49）年、岡本おさみ作詞、吉田拓郎作曲）をご紹介したいと思います。リアルタイムでご存知の諸先輩方には、若造が何を偉そうにと思われるかもしれませんが、しばしご高覧いただけますと幸いです。

この歌では、おそらく恋人と旅行に来た主人公が、知人町で通りがかった家のおばあさんの写真を撮ろうとカメラを向けたところ、相手を「見ているつもり」が、かえって「おふたりさんけんかしても時がたてば楽しくなるよ」と「見られてるよう」で恥ずかしいのだという歌詞が印象的です。

このおばあさんは、「幾年月もおんなじところで遠い霧笛を聞いてきた」とあるように、おそらく漁師であるご主人を「あけっぱなしの玄関」でずっと待っているのでしょう。漁はまさに命懸け。お互いを心配したり思い遣ったりするあまり喧嘩になることも想像に難くありません。それでも、時が経てば楽しくなるという灯台守のようなおばあさんの言葉を、私は現在の釧路で噛み締めています。

お察しのとおり、私の趣味はカラオケです。趣味で気分転換を図ることはもちろん、趣味の話をすることすら憚られるほど緊迫した今般の状況ですが、ワクチン接種などようやく希望の光が見え始めたところでもあり、私の出来ることはごく限られているものの、市職員として市民の皆様のお役に立てるようこれからも精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（佐藤　加奈）

お久しぶりです

ご無沙汰しておりました。６年ぶりに博物館に戻ってまいりました。この“チャランケチャシ”に投稿するのも何年ぶりでしょう…。

私が異動になる年に常設展示の更新、Wi-Fi環境の整備といった事業が始まろうとしていました。

４月に戻って来た時、真っ先に展示を勝手に見せてもらいました。新しい展示はすばらしく、映像を多用しており、目を引くものばかりです。どのように変わったか気になって仕方がなかったのですが、やっと見ることができました。

博物館は現在、外壁や屋上タイルの防水工事をしております。展示も更新され、外観も化粧直しをしています。2021年中には工事も終わり、悩まされ続けていた雨漏りもなくなることでしょう。

さて、私が博物館を離れていた間も館の様子は新聞やテレビなどのメディアを通じ見聞きしており、「みんな頑張っているな。こんなこともやるようになったんだ。いいところに目をつけてるなあ。いいぞ。いいぞ！」などと勝手に応援しておりました。高等看護学院にいた頃は、市民盆踊りに参加する学生のうちわに「はっくん」を張りつけて出場していました。

職場にスズメバチが発生したり、カラスが通路に群がってしまい通行人を脅かすといった問題が起きたとき、その対処法も学芸員に教えてもらい解決しました。何とも頼りになるものです。気になっていた花や鳥、虫の名前などなんでも聞いてしまいます。

先日、小学生が窓口に石の種類を聞きたいと訪ねてきました。担当の学芸員が色々説明し、帰る頃には目がキラキラ、声は弾んでいました。こういった子供たちが、これをきっかけに「もっと石のことを知りたい、将来は学芸員になりたい。」に繋がっていくのでしょう。

釧路市立博物館はハードだけではなくソフトも充実しています。離れていたからこそ分かる博物館の良さを思い知らされる日々です。

（黒坂之美子）